原著

異常傾向に及ぼす影響

加藤 佳子

eating in university students

Yoshiko Katou

(Graduate School of Education, Hiroshima University)

The purpose of this study was to clarify the relationship between attitudes regarding sweets, stress coping, drive for thinness, and inclination to abnormal eating behavior. A total of 302 university students (123 males and 179 females) completed the Scale of Attitude Toward Sweets, stress coping (TAC-24), Drive for Thinness (DFT), and Eating Attitudes Test (EAT-26). For females, path analysis showed that drive for thinness influenced the inclination towards abnormal eating behavior directly, as well as through the attitude towards sweets. Moreover, female's stress coping influenced the inclination towards abnormal eating behavior through the attitude toward sweets. Results also showed significant gender differences in the relationships among these variables. These results suggest that inconsistent attitudes toward sweets result in an inclination for abnormal eating behavior.

Key words: attitudes toward sweets, stress coping, drive for thinness, eating attitudes, university students.

問題

甘い物の摂取は精神的な快をもたらすため、精神的依存性を生じさせる。その依存性はストレスを軽減する上で共通した効果を持つ薬物やアルコールに対する依存と類似した強い欲求を生じさせるとさえもいわれている (Benton, Greenfield, & Morgan, 1998)。ストレスの多い現代社会において、甘味は心理的な癒しをもたらす、精神的ストレスを低減したり解決しようとする対処方略上、情動を制御するために有効な味として働くことから意味があると考えられる。一方、エネルギー過剰摂取を原因の一つとする生活習慣病の増加に

対する警鐘や痩せ願望が強まる社会的風潮のもとでは、甘味は必ずしも受容される味ではないと考えられる。

また近年、飽食の時代に特有の心理的要因に関連した食行動の問題点が指摘されている（高木，1999）。中でも摂食障害は年々広がりを見せており、摂食障害に至らないまでも食行動の異常傾向の増加が危惧されている（向井，1998）。食行動の異常傾向は、準臨床的症候群（subclinical syndrome）ともよばれ（近喰，2002）、摂食障害に結びつく可能性が示唆されている（Button & Whitehouse，1981）。摂食障害の背景には今日的な葛藤や痩せ願望が存在するといわれており、摂食障害に対する脆弱性を持つ者、その他の精神

加藤：大学生の甘味に対する態度が食行動の異常傾向に及ぼす影響

障害に対する脆弱性を持つ者にとって、ストレスとダイエットが摂食障害の誘発因子となっているようである（高木，1991；青木，鈴木，1998；向井，1998）。食行動の異常傾向を摂食障害の連続体として定義するならば、ストレスやダイエットは食行動の異常傾向に脆弱性を持つグループに対しても影響を及ぼすと予測できる。

食行動の異常傾向を示す者は精神的な葛藤を抱え（小林・松岡・栗田，1999；志賀・福島・遠藤，1994）、痩せ願望を持っていることが示されている（吾妻・大野・稲富・田中・大田，2002）。そこで甘味は精神的安らぎをもたらすストレスをやわらげることから、精神的な葛藤を抱える食行動の異常傾向を示す者にとって、ストレス対処方略上、受容すべき対象であると予想できる。一方、甘味はエネルギーの予測因子であることから、痩せ願望を抱える食行動の異常傾向を示す者にとって、ダイエットを実行する上で、拒否すべき対象であると予想できる。そこで甘味に対する受容的態度と拒否の態度が食行動の異常傾向の予測因子であると仮定し、Figure 1 に示したような概念図に従って検討を行った。

Katou, Mori, & Ikawa（2005）は18歳から29歳の若年成人層では甘い物に対する感情が甘い物の摂取に影響していることを報告している。そこで若年成人層はストレス対処方略として、情動を制御するために甘味を利用していると予測される。また摂食障害は圧倒的に青年女子に多くみられるとされているが、近年では男女のボーダレス化とともに青年男子の中にも食行動

の異常を示す者がみられるようになり、今後注意が必要であるとされている（井上，2001）。本研究では甘味に対する態度が、精神的ストレスに対する対処方略や痩せ願望の影響を受け、結果的に食行動の異常傾向に関連すると仮定し摂食障害のリスクグループである青年後期を対象に検討を行った。

方 法

1. 調査対象者

大学生347名（男性138名，女性209名）、平均年齢20.33歳（ $SD=1.81$ ）であった。欠損値のある回答調査票は除き、分析1では甘味に対する態度を測定する尺度の項目すべてに回答した男性133名、女性204名、合計337名を、分析2では今回使用した尺度の項目すべてに回答した男性123名、女性179名、合計302名を分析対象者とした。

2. 調査内容

1) 甘味に対する態度の測定 10歳代、20歳代、30歳代、40歳代、50歳代、60歳以上の各年齢群10名ずつに対し、「自分にとって甘い物を食べることはどのような意味があるか」などの質問42項目についてインタビューを行った。このインタビューによる調査結果と先行研究（加藤 2001；Tuorila & Malamali, 1985 など）にもとづいて甘い物に関する意見文275通りがあげられた。これらの意見文を教官1名、大学院生9名で協議の上、認知、感情、行動に関する項目に分類し、さらに肯定的側面および否定的側面を問う項目に分類

Figure 1 ストレス対処方略、痩せ願望、甘味に対する態度と食行動の異常傾向の関連を表した概念図

して、67項目を精選した。具体的分類の仕方として、「甘味は疲れをいやす」、「甘味は虫歯の原因である」のように甘味の特徴を表す意見文は認知に、「甘い物があると幸せだ」のように甘味に対する感情を表す意見文は感情に、「甘い物を見ると、つい買ってしまう」のように甘味に対する行動を表す意見文は行動に分類した。3つに分類した意見文をさらに「甘味は疲れをいやす」のように甘味に対する肯定的側面を述べた意見文と「甘味は虫歯の原因である」のように甘味に対する否定的側面を述べた意見文とに分類した。すべての意見文に対し、全く当てはまる（6点）から全く当てはまらない（1点）の6件法で回答させた。

2) ストレス対処方略の測定 ストレス対処方略は、神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野（1995）の3次元モデルにもとづくストレス対処方略尺度（TAC-24）を使用し測定した。TAC-24は従来のストレス対処方略尺度にみられた特定の因子やカテゴリーの偏りを改善した尺度で、全24項目で構成されている。先行研究で確認された3因子構造〔①問題解決・サポート希求（情報収集、計画立案、カタルシス）、②肯定的解釈と気そらし（回避的思考、肯定的解釈、気晴らし）、③問題回避（放任・諦め、責任転嫁）〕を適用して以降の分析を行った。 α 係数は問題解決・サポート希求0.77、肯定的解釈と気そらし0.70、問題回避0.82であった。回答形式は5件法である。

3) 痩せ願望の測定 痩せ願望は、馬場・菅原（2000）が作成した痩せ願望尺度を用いて測定した。痩せ願望を「自己の体重を減少させたり、体型をスリム化しようとする欲求であり、絶食、薬物、エステなど様々なダイエット行動を動機づける心理的要因」と定義し、ダイエット方法や食行動の特徴、あるいは痩せたいという理由など具体的な内容には言及せず、痩せたいという意志の強さのみを測定できるよう配慮している。尺度の構造を検討するために主成分分析を行った。その結果、第1主成分の寄与率は70.59%と高く、第2主成分以下の寄与率（第2主成分は8.43%）を大きく上回っており、馬場ら（2000）の研究で得られた結果と同様、強い1次元構造が認められた。 α 係数も0.96と高い値を示した。回答形式は6件法である。

4) 食行動の異常傾向の測定 食行動の異常傾向は日

本語版 Eating Attitudes Test- 26 (EAT-26) (Mukai, Crago, & Shisslak, 1994) を用いて測定した。神経性無食欲症患者に特徴的な摂食態度や食行動などの臨床症状をもとに作成された尺度 EAT-40 (Garner & Garfinkel 1979) の短縮版である EAT-26 (Garner, Olmsted, Bohr, & Garfinkel 1982) は、摂食障害者のスクリーニングに用いられる他（久松・坪井・筒井・篠田, 2000）、1点から6点の採点方法によって摂食障害の連続体として食行動の異常傾向を連続変数としてとらえ、健常者の食行動異常度の測定を目的に利用されている（長谷川・橋本・佐藤, 1999; 吾妻・大野・稲富・田中・大田, 2002）。 α 係数は0.88で、内的整合性が確認された。

3. 調査手続き及び調査時期

調査は授業終了後に集合調査法により行い、自己記入式で調査票への回答を求めた。実施時期は2002年7月であった。

結果と考察 分析1

1. 目的

分析1では甘味に対する態度を測定する尺度の作成を行った。Tuorila & Malamali (1985) は甘い物に対する態度を質問紙によって調査し、女性は甘い物を好みながら甘い物に対して否定的な認知をしていると報告している。しかしこの研究で使用された質問紙は欧米の食形態にもとづいたもので、そのまま日本で使用することは不可能である。また甘い物は悪い物であるという甘い物の否定的な側面をもとに質問紙は構成されている。だが実際には甘い物は疲れを癒し、喜びであるなど肯定的な側面も持っており、肯定的側面が食行動に及ぼす影響は大きいと考えられる。これまでのところ食行動の異常を示す者は甘い物を悪い物であるとする事例報告がなされているが（切池, 2002）、多数の調査対象者からデータを得、統計的な手法を利用した踏み込んだ分析は行われていない。一般的に、対象物に対する態度は認知、感情、行動の3成分で構成されている（Rosenberg & Hovland, 1960）。本研究では、甘味に対する肯定的側面、否定的側面及び認知、感情、行動の3成分を考慮した上で、甘味に対する態

加藤：大学生の甘味に対する態度が食行動の異常傾向に及ぼす影響

度を多面的に測定する尺度を作成し、その信頼性、妥当性の検討を行った。

2. 結果と考察

平均値、歪度、尖度を算出し、分布に偏りがあると考えられる平均値が2未満、5以上のもの、歪度、尖度が絶対値2を超える9項目、ピアソンの相関係数が0.7以上となる6組の項目のいずれか一方について分析の対象から除き計52項目を用いて探索的因子分析を行った。重み付けのない最小2乗法、プロマックス回転、固有値1以上で因子分析を行った。因子負荷量0.4未満のものを削除し同様の方法で因子分析を繰り返した結果、6因子が抽出された。第5、第6因子は含まれる変数が2つであったため以後の分析の対象からははずすことが適当であると考え、第5、第6因子に含まれる4つの変数を削除し再び因子分析を行ったところ Table 1 のような結果が得られた。

次に、各因子に高い負荷を示す項目群の内容から、因子の意味について検討した。いずれの項目群にも内容的に概ね統一性がみられた。第1因子に属する項目内容は甘い物に対する肯定的な認知や感情を示す内容であったので第1因子を“メリット感因子”、第2因子は購買行動など甘い物に対する行動や甘い物の有無

Table 1 甘味態度尺度の因子パターン（重み付けのない最小2乗法、promax 回転）

項目内容	F1	F2	F3	F4	共通性
F1: メリット感因子					
47 甘い物を食べると気分がゆったりする	0.933	-0.119	-0.058	-0.033	0.657
45 甘い物を食べると集中力が上がる	0.865	-0.161	-0.144	-0.084	0.454
39 甘い物を食べるとストレス解消になる	0.740	0.027	0.026	-0.026	0.587
18 甘い物を食べると落ち着く	0.732	0.115	0.016	-0.059	0.663
28 甘い物を食べると気分転換になる	0.711	-0.093	0.146	0.189	0.636
51 甘い物があるととなごやかに話ができる	0.709	-0.027	0.004	0.144	0.561
64 甘い物を食べると元気が出る	0.705	0.102	0.069	-0.002	0.676
12 甘い物があるとやさしい気持ちになる	0.705	0.129	-0.086	-0.114	0.543
16 甘い物があると話が弾む	0.693	0.049	-0.144	0.132	0.529
4 甘味は疲れをいやす	0.632	0.013	0.040	-0.036	0.426
22 頭を使った後は甘い物に限る	0.612	0.012	-0.070	-0.102	0.318
30 甘い物を食べると満足する	0.444	0.304	0.202	0.008	0.697
41 甘い物がそばにあると幸せだ	0.428	0.271	0.238	0.060	0.691
F2: 接近動因子					
8 甘い物がいつもそばにある	0.008	0.837	-0.218	-0.153	0.513
23 甘い物がなかったらつらい	0.026	0.766	-0.040	0.015	0.589
55 甘い物を見ると、つい買ってしまう	-0.016	0.734	0.092	-0.021	0.596
14 食事の代わりに甘い物を食べて済ませることがある	-0.071	0.642	-0.144	0.057	0.294
63 甘い物には目がない	0.196	0.554	0.156	-0.093	0.632
24 この世から甘味がなくなったら楽しみが一つ減る	0.108	0.553	0.141	0.048	0.549
26 友達がいるときは甘い物を用意している	0.266	0.488	-0.362	0.007	0.351
F3: 回避動因子					
42 甘い物が置いてあってもいつまでもなくならない	0.112	-0.001	-0.792	-0.001	0.553
46 甘い物をすすめられると困る	-0.093	0.188	-0.700	0.108	0.437
36 お土産に甘い物をもらってもひとにあげてしまう	0.066	0.224	-0.694	0.043	0.348
31 甘い物があっても捨ててしまうことがある	0.098	-0.052	-0.593	0.073	0.341
*61 甘い物が置いてあると、つい手が出てしまう	0.083	0.305	0.455	0.190	0.614
F4: デメリット感因子					
27 甘い物を食べないよう心がけることは良いことである	-0.161	0.085	-0.143	0.740	0.540
2 甘い物は体に良くないと思う	0.080	-0.138	-0.103	0.523	0.291
15 甘味は虫歯の原因である	-0.079	-0.032	0.057	0.448	0.180
50 甘い物は注意して食べるべきである	0.093	-0.042	-0.069	0.445	0.221

因子間相関

F1	0.762	0.489	0.323
F2		0.557	0.248
F3			0.013

*: その後の分析では得点を反転させた。

に対する感情を示す内容であったので第2因子を“接近動因因子”、第3因子は甘い物を遠ざける行動や感情であったので第3因子を“回避動因因子”、第4因子は甘い物に対する否定的な認知を示す内容であったので第4因子を“デメリット感因子”と解釈し命名した。

因子分析の結果、得られた各下位尺度ごとの項目—総得点間相関を算出したところ、全て0.30以上の値を示し、ほとんどが0.45～0.75程度の値を示した。 α 係数は、各下位尺度で0.94、0.85、0.75、0.60であった。よってほぼ内的整合性が示されたといえる。

因子間相関を算出したところ第1因子の“メリット感因子”と第2因子の“接近動因因子”の間に0.76と強

い相関が見られたが、設問の内容が異なるので分けて分析することとした。

男女別に平均点を算出し t 検定を行ったところ (Table 2)、女性の方が男性より甘味に対するメリット感、デメリット感が強く、甘味に対する認知や感情の程度が強いことが示された。また甘味に対する接近の程度を示す得点も高く、これらの結果は、女性の方が男性よりも甘い物の肯定的な特徴も否定的な特徴も強く認知しており、甘い物を好み、よく摂取するという先行研究 (加藤・井川, 2002; 加藤, 2001; Tuorila & Malamali, 1985) の結果と一致する傾向であった。よって本研究における甘味に対する態度を測定する尺度は、概ね妥当性を持つものであると考えられる。

Table 2 甘味に対する尺度、食行動の異常傾向についての男女別平均値 (SD) と t 検定結果

	男性	女性	全体	t 値
メリット感 ^{a)} ($n=337$)	43.35 (13.51)	53.44 (11.19)	49.45 (13.10)	7.45 ***
デメリット感 ^{b)} ($n=337$)	14.64 (3.61)	15.56 (3.22)	15.20 (3.40)	2.46 *
接近 ^{c)} ($n=337$)	19.76 (7.04)	25.45 (7.26)	23.20 (7.68)	7.12 ***
回避 ^{d)} ($n=337$)	13.16 (4.71)	11.57 (4.62)	12.20 (4.71)	3.06 **
食行動の異常傾向 ^{e)} ($n=302$)	49.78 (18.13)	55.14 (15.12)	52.96 (16.59)	2.79 ***
痩せ願望 ^{f)} ($n=302$)	23.37 (11.76)	34.30 (11.23)	29.85 (12.63)	8.15 ***
問題解決・サポート希求 ^{g)} ($n=302$)	29.73 (6.13)	32.09 (5.40)	31.13 (5.82)	3.53 ***
問題回避 ^{h)} ($n=302$)	14.11 (4.61)	13.15 (4.10)	13.54 (4.33)	1.92 (n.s.)
肯定的解釈と気そらし ⁱ⁾ ($n=302$)	29.76 (5.57)	29.18 (5.40)	29.42 (5.47)	0.91 (n.s.)

***: $p<0.001$ **: $p<0.01$ *: $p<0.05$

注) 尺度の得点範囲

a): 13～78, b): 4～24, c): 7～42, d): 5～30, e): 26～156, f): 11～55,
g): 9～45, h): 6～30, i): 9～45

分析 2

1. 目的

ストレス対処方略、痩せ願望が甘味に対する態度に影響し、甘味に対する態度が摂食障害の連続体である食行動の異常傾向に影響していると仮定し検討を行った。

2. 結果と考察

食行動の異常傾向、痩せ願望、ストレス対処方略尺度得点の性差を検討するために t 検定を行った。男女別の平均値と標準偏差および t 値を Table 2 に示した。女性は男性よりも食行動の異常傾向、痩せ願望が有意に強くこれまでの研究と一致した傾向がみられた(田中, 2001)。ストレスに対する対処方略では問題解決・サポート希求型のストレス対処方略をとる程度が女性の方が有意に高くなっていた。

甘味に対する態度がストレス対処方略、痩せ願望、食行動の異常傾向と関連があるかを検討するために、各変数間の単相関(ピアソンの相関係数)を求めた(Table 3)。弱い相関ではあるが、いくつかの項目間で有意な相関が示された。ストレス対処方略の問題解決・サポート希求は甘味に対するメリット感や接近と、肯定的解釈と気そらは甘味に対するメリット感と関連があり、痩せ願望は甘味に対する態度を測る4つ全ての側面(メリット感、デメリット感、接近動因、回避動因)と関連があることが示された。そして甘味に対するメリット感、デメリット感、接近動因は

食行動の異常傾向と関連があることが示された。これらの相関関係および Figure 1 に示したような概念図にもとづいて、パス解析を行ったところ $\chi^2=13.605$, $p=0.556$, $GFI=0.990$, $AGFI=0.970$, $RMSEA=0.000$ と高い適合度を示し、モデルはデータに適合していた。

Table 2 に示したように甘味に対する態度、食行動の異常傾向、痩せ願望、問題解決・サポート希求型のストレス対処方略には性差が存在した。そこで男女にわけてパス解析を行ったところ、男女ともに高い適合度を示し(男性: $\chi^2=14.915$, $p=0.458$, $GFI=0.974$, $AGFI=0.922$, $RMSEA=0.000$, 女性: $\chi^2=15.583$, $p=0.410$, $GFI=0.981$, $AGFI=0.942$, $RMSEA=0.015$)、本モデルは男女それぞれについて分析する上においても十分な基準を満たしている。また男女それぞれの標準化パス係数に異なった特徴がみられた(Figure 2, 3)。パス係数が有意である因果関係について検討する。

はじめに、甘味に対する態度と食行動の異常傾向との関係をみってみる。男性では甘味に対する接近動因が食行動の異常傾向を説明しており、女性では甘味に対する接近動因、回避動因の両方が食行動の異常傾向を説明していた。つまり女性では甘味に対するアンビバレントな態度が食行動の異常傾向を説明することが明らかとなった。これら結果から女性の食行動の異常傾向は、過食、拒食の両方をその特徴として持つアンビバレントなものであり、男性の食行動の異常傾向は主に過食をその特徴として持つと推測できる。ところで切

Table 3 甘味に対する態度と対処方略、痩せ願望、食行動の異常傾向の相関

	EAT	PA	PS	PU	DS
M	0.208 ***	0.030	0.266 ***	0.174 **	0.299 ***
D	0.193 **	0.064	0.062	0.015	0.215 ***
AC	0.312 ***	-0.027	0.163 **	0.076	0.344 ***
AV	-0.084	0.093	-0.046	0.043	-0.131 *

***, $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

注) PA: 問題回避 PS: 問題解決・サポート希求 PU: 肯定的解釈と気そらし DS: 痩せ願望

EAT: 食行動の異常傾向 M: メリット感 D: デメリット感 AC: 接近 AV: 回避

Figure 2 甘味に対する態度と対処方略、痩せ願望、食行動の異常傾向のパス図 男性
 —▶: 有意なパスを示す ----▶: 有意ではないパスを示す 3つの対処方略間の偏相関、標準誤差の記述は煩雑になるので省略した

Figure 3 甘味に対する態度と対処方略、痩せ願望、食行動の異常傾向のパス図 女性
 —▶: 有意なパスを示す ----▶: 有意ではないパスを示す 3つの対処方略間の偏相関、標準誤差の記述は煩雑になるので省略した

池（2002）によると摂食障害の者は甘味を回避する傾向にあると報告されている。この点をふまえて今回得られた結果を見てみると、摂食障害の連続体である食行動の異常傾向においては、男性は必ずしも甘味に対して回避的ではないことが示唆された。また男女とも甘味に対して接近動因の程度が強いことが食行動の異常傾向を説明していた。甘味からの回避が臨床的症候群である摂食障害の特徴であることとあわせて考えると、甘味に対する接近動因の強さは摂食障害にはつながらず食行動の異常傾向にとどまるものであるが、女性に見られる回避動因の程度の強さは摂食障害を予想させる変数となりうることが推測できる。しかし本研究から得られた結果の範囲ではその詳細を説明することはできない。

痩せ願望との関係に注目してみる。痩せ願望と甘味に対する態度との関係をみると、男性は、痩せ願望が強いと予想通り甘味に対するデメリット感が高くなっていた。デメリット感からは甘味に対する回避動因へ有意なパスが引かれたが、回避動因から食行動の異常傾向へと有意なパスは引かれなかった。ところが同時に痩せ願望からメリット感、メリット感から甘味に対する接近動因へ正の関係を示すパスも引かれていた。女性は男性と異なり痩せ願望の強さは甘味に対する認知や感情（メリット感）に反映されておらず、直接甘味に対する行動傾向（接近動因、回避動因）に関連していた。女性では痩せ願望が強まると肯定的側面（接近動因）が強まり、否定的側面（回避動因）が弱まっていた。つまり男性は痩せ願望が強くなるほど、甘味に対して肯定感も否定感も強まり甘味に対するアンビバレントな態度がみられた。一方、女性は痩せ願望が強くなると一貫して甘味に対して肯定的となる。

次に痩せ願望と食行動の異常傾向の関係をみる。痩せ願望の強さは男女とも食行動の異常傾向をきわめて強く予測しており、痩せ願望の強さが摂食障害の特徴であると同様（中井，1997）、摂食障害の連続体である食行動の異常傾向においても痩せ願望は予測因子として考えられる。では甘味に対する態度を媒介とした痩せ願望と食行動の異常傾向の関係はどのようなものであろうか。男性では甘味に対するメリット感と接近動因を媒介変数として痩せ願望は食行動の異常傾向を

説明していた。そして女性では甘味に対する接近動因を媒介変数として痩せ願望は食行動の異常傾向を説明していた。はじめ痩せ願望は甘味に対する拒否的な態度を媒介変数として、食行動の異常傾向を予測すると仮定していた。しかし実際には痩せ願望は甘味に対する受容的な態度を媒介変数として食行動の異常傾向を説明していた。つまり甘味に対する態度が痩せ願望と食行動の異常傾向の媒介変数として一定の予測力を持つことは確認されたが、そのプロセスは所期の仮説と異なるものであった。ハーマンら（Herman & Mack, 1975）は自制仮説でダイエット欲求により摂食に対する抑制の強い者程、いったん抑制のバランスを崩すと多くを摂食する傾向にあると報告をしている。痩せ願望が強い程、甘味に対して受容的となり、食行動の異常傾向が強まる過程はハーマンらの報告と一致する。

次にストレス対処方略との関係について検討してみる。女性では肯定的解釈と気そらしといった情動を統制しようとするストレス対処方略が甘味に対するメリット感を高めていた。そしてメリット感は接近動因の程度を強め食行動の異常傾向を説明していた。つまりストレスに対する対処方略として、甘味が持つ精神的な安らぎを与えるという情動制御上の性質を認知し利用することは、食行動の異常傾向を高める可能性があり、情動の統制に成功していないと考えられる。岡本・中津・河村（2000）の研究においても摂食障害者は自分の情動を回避的に調整することができないとの結果が得られており食行動の異常傾向を測った本研究で得られた結果と一致した傾向が見られた。また一般的に情動焦点型ストレス対処は精神的健康において不適切な結果を招くとされている（Suls, David, & Harvey, 1996）。情動焦点型ストレス対処を甘味に対する態度に反映させた場合にも、食行動において不適切な結果が見られることが今回の研究から示唆された。男性ではストレス対処方略が甘味に対する態度を通して食行動の異常傾向を予測するパスは見られなかったが、ストレス対処方略で問題回避的な方略をとることが、直接食行動の異常傾向を説明しており、甘味に対しても回避的になっていた。つまり女性では仮説どおりストレス対処方略と食行動の異常傾向の媒介変数として、甘味に対する態度は食行動の異常傾向を

説明する一定の予測力を持つことが示されたが、男性では甘味に対する態度は、ストレス対処方略と食行動の異常傾向の媒介変数として所期の予測力を持っていなかった。また馬場ら（2000）や加藤（2004）の研究では、ストレスと痩せ願望の間には相関関係があることが明らかにされているが、ストレス対処方略と痩せ願望との間には有意な関連は見られなかった。

まとめと今後の課題

痩せ願望は甘味に対する否定的な態度を予測し、ストレス対処方略は肯定的な態度を予測すると仮定した上で、痩せ願望およびストレス対処方略と食行動の異常傾向の媒介変数として甘味に対する態度を想定し、本研究を進めた。甘味に対する態度と食行動の異常傾向との関係をみると、女性の甘味に対するアンビバレントな態度が食行動の異常傾向を説明していた。そして痩せ願望と甘味に対する態度との関係をみると、男性は痩せ願望が強くなるほど甘味に対する態度がアンビバレントとなり、女性は一貫して肯定的になっていた。また甘味に対する態度を媒介とした痩せ願望と食行動の異常傾向との関係は、所期の仮説とは異なり、痩せ願望は甘味に対する肯定的側面を説明していた。しかし痩せ願望は直接、食行動の異常傾向を予測するとともに、甘味に対する態度を媒介変数として、間接的にも食行動の異常傾向を予測していた。ストレス対処方略と甘味に対する態度との関係については、男性では仮定した関連が見られなかったが、女性では情動調節型の対処方略は甘味に対するメリット感を説明し、食行動の異常傾向を予測していた。つまり痩せ願望と甘味に対する態度との関係については予測した関係とは異なった結果が得られたものの、女性では痩せ願望とストレス対処方略は甘味に対する態度を媒介として食行動の異常傾向を説明することが明らかとなった。しかし男性では、部分的にしかその関係を支持することができなかった。

安田・佐藤（2002）によると行動は、接近動機システムと回避動機システムの競合によって制御され、行動抑制システムと行動接近システムのバランスの崩れが結果的に精神的な不健康をもたらすと説明されてい

る。本研究から得られた調査結果より、痩せ願望やストレス対処方略によってもたらされた甘味に対する態度における行動抑制システムと行動接近システムのバランスの崩れが、食行動の異常傾向の一原因となっていると考えられる。痩せ願望に関しては自制仮説で説明されるような行動抑制システムと行動接近システムの崩壊が甘味に対する態度に反映され、精神的な不健康を示す食行動の異常傾向となったと推測できる。情動調節型の対処方略が食行動の崩壊要因となる過程については詳しく検証されていないが、気晴らし方略など情動焦点型の対処方略を行う場合、方略の使用方法によっては気晴らしを行う対象に依存的となることが明らかにされている（及川，2001）。よって甘味を利用して情動焦点型の対処方略を行う過程では、甘味に対する依存性が増大し、行動抑制システムと行動接近システムのバランスの崩れていることが推測される。しかしこの点について論じるためには、さらに詳細な検討が必要であると考えられる。

本研究では食行動の異常傾向を測る尺度として Eating Attitudes Test- 26 (EAT-26) を使用したが、EAT-26 は過食症が拒食症とは別個に診断されていない時代が開発されたため、過食症状を評価するような項目は乏しいとされている（向井，1998）。そのため本研究では甘味に対する態度は、主に拒食症状に関連する異常傾向と関わりがあることが推測される。しかしこの点について明らかにするために、食行動の異常傾向を測る尺度をより多面的に充実させた上で調査し、分析する必要があると考える。

以上のような点を踏まえながら痩せ願望、ストレス、甘味に対する態度、食行動の異常傾向のプロセスをより詳細に検討していくことが課題となるであろう。近年、態度変容を視野に入れた食生活指導が目立ってきており（富田・上里，1998）、食行動を中心に据えた指導が必要とされている。このような指導を充実させるためにも、食行動パターンのより精緻化したプロセスを検討することは非常に意義深いことであると思われる。

引用文献

- 青木省三・鈴木啓嗣 1998 摂食障害をめぐる Comorbidity 臨床精神医学, **29**, 1511-1515.
- 吾妻ゆみ・大野弘之・稲富宏之・田中悟郎・大田保之 2002 女子大学生における食行動の実態とその社会・心理的要因について 精神医学, **44**, 521-527.
- 馬場安希・菅原健介 2000 女子青年における痩せ願望についての研究 教育心理学研究, **48**, 267-274.
- Benton, D., Greenfield, K., & Morgan, M. 1998 The development of the attitudes to chocolate questionnaire. *Personality and Individual Difference*, **24**, 513-520.
- Button, E., & Whitehouse, A. 1981 Subclinical anorexia nervosa. *Psychological Medicine*, **11**, 509-516.
- Garner, D., & Garfinkel, P. 1979 The Attitudes Test: an index of the symptoms of anorexia nervosa *Psychological Medicine*, **9**, 273-279.
- Garner, D., Olmsted, M., Bohr, Y., & Garfinkel, P. 1982 The Eating Attitudes Test: Psychometric features and clinical correlates. *Psychological Medicine*, **12**, 871-878.
- 長谷川洋子, 橋本幸, 佐藤豪 1999 対人関係における基本的構えが摂食障害傾向およびボディ・イメージの歪みに与える影響 健康心理学研究, **12**, 12-23.
- Herman, C. P. & Mack, D. 1975 Restrained and unrestrained eating. *Journal of Personality*, **43**, 647-660.
- 久松由華・坪井康次・筒井末春・篠田知璋 2000 一般女子大学生に対する摂食障害の一次スクリーニング法についての検討 **40**, 325-331.
- 井上洋一 2001 食行動と性 臨床精神医学, **30**, 797-800.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1995 対処方略の三次元モデルと新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談, **33**, 41-47.
- Katou, Y., Mori, T., & Ikawa, Y. 2005 Effect of age and gender on attitudes towards sweet foods among Japanese. *Food Quality and Preference*, **16**, 171-179.
- 加藤佳子 2001 甘味に評価に関する研究～甘味の質及び性や年齢の影響について～ 広島大学教育学研究科修士論文 (未公刊).
- 加藤佳子, 井川佳子 2002 糖溶液に対する中学生および成人の好みの分析 日本食生活学会, **13**, 99-106.
- 加藤佳子 2004 ストレスおよび痩せ願望と甘味に対する態度との関係—女子大生の場合— 日本教育心理学会第46回総会発表論文集, 105.
- 切池信夫 2002 摂食障害：心の科学, **106**, 76-82.
- 小林由美子, 松岡恵子, 栗田広 1999 女子高校生における摂食障害傾向と環境要因との関連 **41**, 821-829.
- 近喰ふじ子 2002 摂食障害の疫学と要因—準臨床的症候群の位置付けと考え方— 日本食生活学会誌, **13**, 84-93.
- Mukai, T., Crago, M., & Shisslak, C. M. 1994 Eating attitude and weight preoccupation among female high school students in Japan. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **35**, 667-688.
- 向井隆代 1998 摂食障害 児童心理学の進歩 **37**, 金子書房, Pp.225-246.
- 中井義勝 1997 Eating Disorder Inventory (EDI) を用いた摂食障害患者の心理的特性の検討 精神医学, **39**, 47-50.
- 及川 恵 2002 気晴らし方略の有効性を高める要因—プロセスの視点からの検討— 教育心理学研究 **50**, 185-192.
- 岡本百合, 中津完, 河村隆弘 2000 摂食障害患者における感情状態とストレス対処行動—治療的介入との関係について— 心身医, **40**, 334-338.
- Rosenberg, M. J., & Hovland, C. I. 1960 Cognitive, affective and behavioral components of attitudes. In Rosenberg, M. J. & Hovland, C. I. (Eds.), *Attitude organization and change* London: Yale University Press. Pp.1-14.
- 志賀令明, 福島峰子, 遠藤安行 1994 女子高校生のやせ願望と食行動の分析 (2) 精神医学, **36**, 1181-1188.
- Suls, J., David, J. P., & Harvey, J.H. 1996 Personality

- and coping : Three generation of research. *Journal of Personality*, **64**, 711-735.
- 高木州一郎 1991 摂食障害の発症誘発因子と準備因子の検討 臨床精神医学, **20**, 319-327.
- 高木州一郎 1999 食の精神医学 野上芳美, 竹中秀夫編 精神医学レビュー **32**, ライフサイエンス Pp5-17.
- 田中有可里 2001 高校生における食行動異常と痩せ願望 カウンセリング研究, **34**, 300-310.
- 富田拓郎・上里一郎 1998 食物選択と食物の嗜好、食物摂取の態度・信念・動機、摂食抑制との関連性について：実証的展望 健康心理学研究, **11**, 86-103.
- Tuorila, O. H. & Malamali, K. S. 1985 The Relation of Attitudes and Experience of Finnish Youths to their Hedonic Responses to Sweetness in Soft Drink. *Appetite*, **6**, 115-124.
- 安田朝子・佐藤徳 2002 行動抑制システム・行動接近システム尺度の作成ならびにその信頼性と妥当性 心理学研究, **73**, 234-242.

謝 辞

本研究を行うに当たり、広島大学教育学研究科教授 森敏昭先生と井川佳子先生にご指導を賜りました。また三重大大学教育学部林未和子先生には多くのご協力を頂きました。ここに記して心よりお礼申し上げます。

(2003.1.30 受稿, 2005.1.17 受理)